

お話をして命が助かる話

ウクライナ

もし、あなたが、野原やぶか藪きか森か、気味の悪いところで夜を明かすことになったら、仲間たちとお話を聞かせ合いましょう。もしもひとりだったら、自分にお話をして聞かせるのです。というのは、森女もりおんなというのがいて、人間を惑まじわして藪の中に誘いこみ、二度と出られなくしてしまうからです。でも、森女はお話を聞くと、人間に近づく力が無くなってしまうです。

あるとき、ひとりの男が、森で行き暮れてしまいました。遠くのほうに明かりが見えたので、藪をかき分けて、なんとか小さな小屋にたどり着きました。小屋には、女がふたり住んでいました。男は、

「森で迷ってしまいました。どうかひと晩泊めてください」とたのみました。女たちは、

「泊めてあげるけど、お話をしてはいけないよ」といいました。男は、

（これは森女だな）と気がつきましたが、知らないふりをして、

「お話なんかしませんよ」と答えました。

森女たちは、男を殺して食べようと、こっそり相談を始めました。そのとき、男は、ふくろからパンをひとつ取りだして、いいました。

「パンのやつはかわいそうだなあ。粉こなにひかれて、こねられるんだからなあ」

「こら、お話をしてるじゃないか」と、森女がいました。

「いいえ、パンのことをいっているだけです。こねてのばして、またこねて、形にして寝かせておくんです」

「こら、お話をやめろ」

「パンのことをいってるだけです。ふつくらふくらんだら、かまどに入れて焼くんです」

「こら、だまるんだ」

「焼けたら、冷まして切って、バターをつけて食べるんです」

男が素晴らしい終えたか終えないうちに、森女たちは、パチンとはじけてしまいましたとき。おしまい

村上郁再話